

結核

第九卷 第五號

昭和六年五月二十四日發行

綜 說

眼結核ニ就テ

其六、網膜視神經系ノ結核

慶應義塾大學醫學部教授

醫學博士 菅 沼 定 男 述

網膜實質組織ノ原發性結核ハ甚ダ稀デアツテ、今日マデニ報告サレタ少數例モ、ソノ多クハ脈絡膜ニ原發シタ結核ノ、網膜中へ進入シタモノト思ハレル、此等ノ報告者ガ網膜ノ變化ガ初發ノ變化デ、脈絡膜ノソレガ續發性變化デアルト主張スル論據ハ、網膜ノ破壞程度ガ脈絡膜ノソレヨリモ高度デアルト謂フニアル、然シ此論據ハ結核性病機ニ對スル各組織ノ特異性(組織免疫其他)ノ相違ト謂フコトヲ考慮セズニ、顯微鏡下ニ見エル組織ノ變化ノ程度ヲ唯一ノ目標トシテ異種組織内ノ病竈ノ新舊ヲ論ジテ居ルノデアル。

網膜實質組織ノ結核ノ此ノ如ク稀ナルニ反シ、網膜血管、特ニ靜脈結核ハ屢々發見サレル。ソノ臨牀所見ノ主ナモノハ、再發性ノ網膜硝子體出血デアツテ、突然視力障礙ガ起リ、出血ノ多量ナ場合ニハ硝子體中ニ血液ガ充滿シ、患者ノ視力ハ光覺ノミトナル。若シ出血ガ少量デ眼底ノ見エル場合ニハ、網膜靜脈ニ指環ヲ嵌メタ様ナ白斑ガ發見サレル。組織學的ニハ結核性ノ靜脈周圍炎デアツテ、ヤガテ内膜モ侵サレテ血行ガ絶エルニ至レバ、檢眼鏡デハ、白線化シタ靜脈ヲ認メル、マタ前述ノ指環形白斑ハ動靜脈ノ交叉部ニ發生スルコトガ稀デナイ。

網膜ニ此ノ如キ變化ノ發見サレルト同時ニ往々、脈絡膜中ニ散在性ノ粟粒大病竈ノ發見サレルトコトガアル。一派ノ學者ハ、本症ノ、葡萄膜前半部結核ニ續發スル二次的疾患デアアルコトヲ主張スルケレドモ、(稀ニハ其ノ様ナコトガアルトシテモ)、最モ多クノ場合ハ原發性疾患デアアル(眼内デハ)。

網膜血管ト同様ニ、視神經血管モマタ侵サレテ、中心靜脈血栓ノ症狀ガ現ハレ、乳頭ヲ中心トシテ、車軸狀ニ散布スル多數ノ出血斑ガ見ラレ、マタ時ニハ球外視神經炎ノ症狀ヲ呈シテ、視野ニ中心暗點ノ現ハレルコトガアルト謂ハレル。

此ノ如キ結核性靜脈周圍炎ハ、何故カ青年期ノ男子ニ好發シ、女子ニハ稀有デアツテ、嘗テ述ベタ鞏角膜結核ガ青年期ノ女子ニ好發スル事實ト、面白イ對象デアアル。

網膜靜脈炎ノ豫後ハ不良ナコトガ多イ、即チ再發スル出血ノタメニ、出血性ノ綠内障ガ續發シ、或ハ硝子體內ノ血液ノ機化ニヨツテ膠質組織竝ニ結締織ノ新生ガ起リ、ソノ收縮ノタメニ、網膜剝離ガ起テ失明スルコトガ稀デナイ。

視神經乳頭ニ稀ニ結核腫ガ成立スル、帶黃灰白色デ表面ノ凹凸不平ナ腫瘤ガ硝子體ニ向テ突隆シ、其周圍ニ數個ノ同一色調ノ斑點ヲ伴フコトガアル。此ノ如キ場合ニハ眼球ノ摘出ヲ要スルコトガ多イ。

其七、眼結核ト全身性結核トノ關係ニ就テ

強義ニ云ヘル原發性ノ眼結核ナルモノハ甚ダ稀デ、結膜結核デスラ、其最多クノ場合ハ血行傳染ニ因ルト考ヘル學者ガ多イ、動物ノ結膜囊内ヘ結核菌ヲ入レテモ、局所ニハ變化ヲ起サズニ、局所淋巴腺ニ變化ヲ起スカ、時ニハ此關門ヲモ突破シテ胸部ニ達スルコトガアルト謂ハレル。

此ノ如クシテ眼結核ノ最大多數例ハ血行ニ因ル内傳染デ成立スルノデアツテ、ランケノ三期分類法ニ從ヘバ、第二期ニ屬シ、アシヨッフノ組織學的分類法ニ從ヘバ純滲出型モ純増殖型モ共ニ稀デアツテ、其ノ混合型ガ最多イ。

コノ眼結核ト全身性結核トノ關係ニ就テハ近日、吾國大眼科學教室員ガ報告スル筈デアアルカラ詳細ハ之ニ讓ルコトニスル。(完)